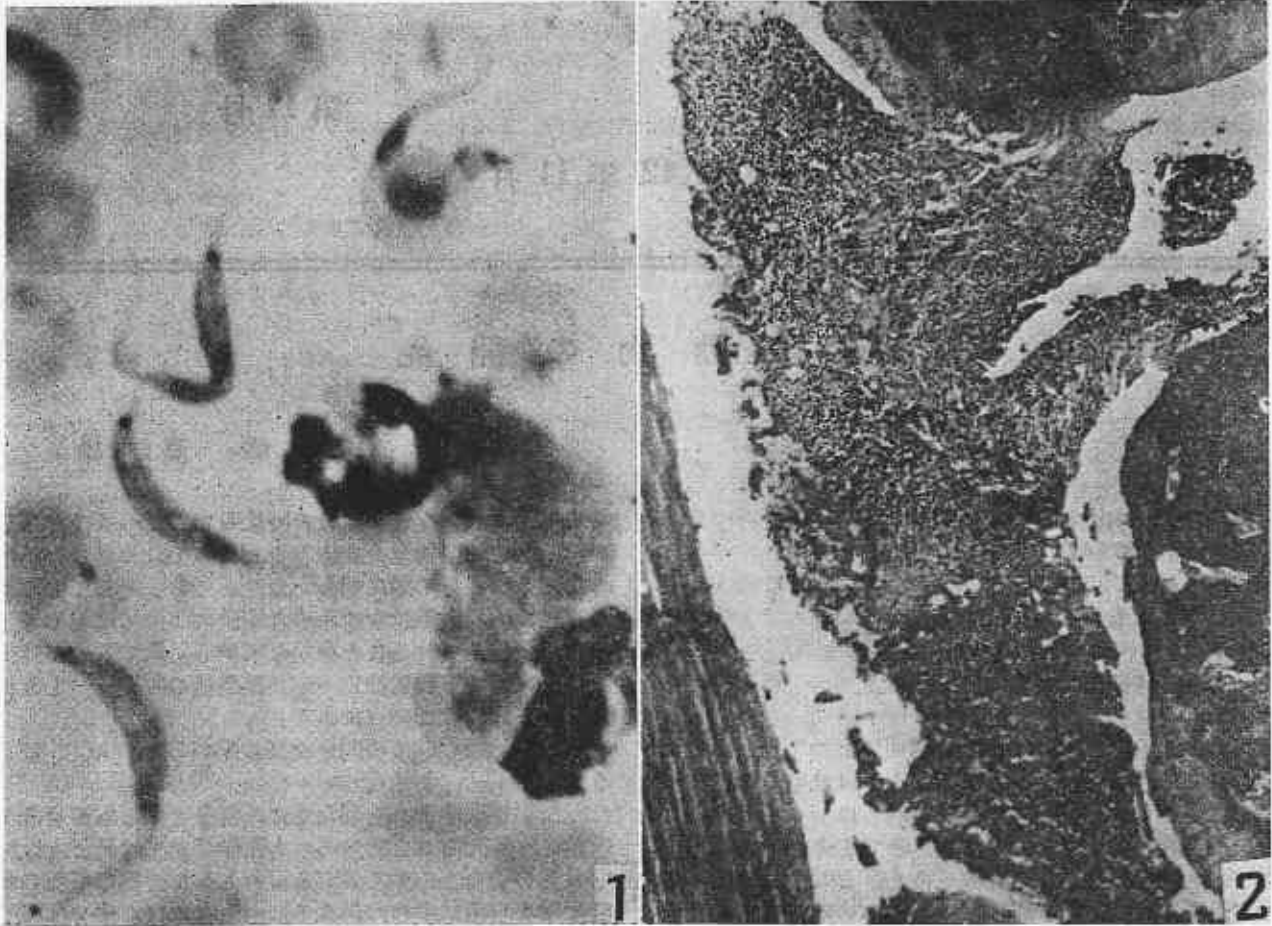


トリパノゾーマの局所増殖をともなうラットの関節炎

東京大学医科学研究所出題・第7回獣医病理学研修会標本 No. 94



1966年10月に購入した市販ラット（4～5週，120～150g）の1群に4肢の肘または跗関節附近より末端にわたる発赤腫大の著しい症例が散発し，重い例ではおそらく痛みのために病肢を挙げて横臥したまま極度に衰弱したのもあつた。これらのラットのの一部は吉田肉腫の移植実験中のものであつたが，無処置ラットにも同じ症例が発生した。

発現部位は1肢のみに限られるものから4肢全部が侵されたものまで様々であつたが，後肢が前肢よりも頻度が高く，もつとも多かつたのは後肢跗関節部であつた。

重症のもの3例について次のような検索を行なつた。その2例は吉田肉腫移植ラットで4肢ともに腫大著しく，他の1例は無処置で両後肢のみが侵されていた。腫大関節部には外傷をみとめず，切開によりやや白濁した滲出液が流出し，あるものでは関節嚢内にチーズ状の滲出物が貯溜していた。剖検により種々の程度の脾腫をみとめた他は，肉眼的に各臓器の変化はみられなかつた。また，関節病変部，脾，肝，心血についてウサギ血溶寒天培地，PPLO Broth (Difco)，Klieneberger の boiled blood 培地に培養を試みたがすべて陰性であつた。

関節部滲出液の塗抹ギムザ染色標本で，全例について

多数の好中球とともに無数のトリパノゾーマを検出したので（写真1），関節腫大部組織の10%食塩水乳剤をつくりその0.2mlを体重100gのラット2匹の両後肢蹠皮下に注射した。注射後数日で局所及跗関節部の著明な腫大がおこり，7日後に殺して検査したところ病変部滲出液の塗抹標本で多数のトリパノゾーマをみとめた。さらに前述のようにして病変部組織乳剤を別のラットに接種すると，再び数日後に多数のトリパノゾーマの検出される関節炎が発現した。

自然例の腫大関節部を脱灰処理して組織学的に検査したところ，多数の好中球の浸出をともなう関節嚢の炎症像がみられ（写真2），骨髓，筋肉及皮下織にも化膿性炎が波及していた。ある例では，肉芽組織の形成がかなり著明であつた。関節嚢，皮下織の浸潤細胞に混在して多数の類円型，三日月型のトリパノゾーマと思われる小体のみとめられた。

ラットに高率に寄生する住血性の *T. lewisii* が何らかの副次的要因で病原性が高まつたことも考えられ，また，PPLOの関与についても検討の余地はあるが，いずれにしてもトリパノゾーマが関節炎の発生に重要な役割を果していることは明らかである。